

第17号

1999年10月

社會經濟史學會中國四國部會

會報

(発行)

会報編集委員会

岡山大学経済学部内
岡山市津島中3-1

社会経済史学会中国四国部会

1999年度大会

プログラム

(岡山大学経済学部 5階会議室)

大会1日目 1999年11月6日(土)

1. 1:30~2:10 報告者 上田賢一
(岡山近代史研究会)

「軽便鉄道の地域的展開

—岡山県「井原笠岡軽便鉄道」の場合—

司会: 岩橋 勝

2. 2:10~2:50 報告者 大川篤志
(岡山大学大学院)

「戦前期における産業構成の府県別動向」

司会: 在間宣久

3. 2:50~3:30 報告者 河内信子
(岡山大学)

「戦前期岡山県におけるトラホームについて
—『岡山県統計書』にもとづく検討—

司会: 末広菜穂子

休憩 3:30~3:40 (10分間)

4. 3:40~4:20 報告者 畠中茂朗
(早稲高校)

「明治前期の山口県における三井銀行の

営業活動」 司会: 平田桂一

5. 4:20~5:00 報告者 松本俊郎
(岡山大学)

「1940年代後半における中国東北の戦後
情勢—ソ連軍の進駐と国共内線の帰結—

司会: 川井 悟

6. 5:00~5:40 報告者 神立春樹
(岡山大学)

「日本高等教育制度確立過程における国家と
高等教育機関」 司会: 高橋 衛

5:40~ 総会

6:00~ 懇親会

(経済学部 1階教育控室)

大会2日目 1999年11月7日(日)

7. 9:30~10:10 報告者 熊谷正文
(伊予史談会)

「わが国近代漁業の地域的展開」

司会: 下野克巳

8. 10:10~10:50 報告者 千田武志
(広島国際大学)

「アメリカ第6軍第10軍団の進駐と展開」

司会: 道重哲男

9. 10:50~11:30 報告者 木村健二
(下関市立大学)

「近代山口の地域編成と朝鮮」

司会: 森元辰昭

10. 11:30~12:10 報告者 松尾展成
(岡山大学)

「アウグスト強健侯と肥前磁器—18世紀

日本=ザクセン交流史の側面—

司会: 及川 順

12:10~ 閉会

地域史研究をめぐる最近の動き

松山大学 岩橋 勝

1 東予天領(松山藩預り地)庄屋・河端家 文書の受託・仮目録の作成

本学における、比較的まとまった愛媛県下を中心とした近世関係史料としては、これまで南予宇和島藩領庄屋・亀甲家文書と、約2千点よりなる藩札(奥平コレクション)が図書館に収蔵され、一般公開されている。このほど宇摩郡土居町上野の河端康三氏旧蔵史料が本学に永久寄託され、仮目録の作成がおおむね終了し、それらの一部については学外者の閲覧も可能となった。

内容は、寛文年間(1660年代)以降明治期までの庄屋文書・公文書と、主として江戸中期から昭和期までの私家文書が合わせて約6千点、さらに江戸時代同家で代々利用された漢籍・和書類が約1,200冊などとなっている。史料の特徴としては、天領の庄屋文書に典型的な村政(公用日記類を含む)・土地・租税・林野・水利・農民移動関係を中心とする公用史料が中核を占め、私的文書としては、幕末・明治初年の地主経営(とくに日雇い関係が目立つ)にかかわるものと、18世紀中期以降幕末期に至る土地集積と金融にかかわる記録が比較的まとまって残存している。同様に比較的まとまりのよい漢籍・和書類は、この地方の庄屋・地主層の知的水準や趣味の分野を窺い知れる絶好の資料であり、内容分野別の残存度はもともと良好ではないかと思われる。

2 『高島亀太郎日記』の翻刻・刊行

1994年に本学が永久寄託を受けた、高島亀太郎資料(約3万点)のうち、もともと資料的価値があるとされる日記が、昨年度より翻刻・刊行がはじまり、このほどその2冊目が本学総合研究所『所報』研究成果として

出版された。

高島亀太郎は明治初年宇和島の生糸商に生まれ、大正期からは製糸業に乗り出し、昭和期に宇和島商工会議所が設立されると、初代会頭に就任。戦時下、製糸業を廃業したあとは、戦後、家業として山林・海運・木工業などに手を伸ばした。一方、明治末年より、町会議員(市制施行後は市会議員)、大正中期より県会議員をも兼ね、昭和12年からは衆議院議員を2期つとめ、その間宇和島市長も一期兼務した。このように典型的な地方名望家といえるが、それよりも大正期前後の日本挿絵界を一世風靡した、画家高島華宵の兄であったと言ったほうが印象的であろう。

日記は亀太郎が13歳であった明治30年から始まり、89歳で亡くなる昭和47年まで76年間も続く(ただし、20年分の欠落あり)。年により、備忘的なメモ程度にとどまる所もあるが、これだけの人物がほぼ全生涯にわたる長期の私的記録を残したということが、大きな特徴といえる。本学経済学部・川東博弘氏が中心となり、法学部三好昌文氏などの本学スタッフのほか、愛媛大学、松山東雲女子大学の関係研究者も加わって、精緻な校閲を行っているばかりでなく、随所に専門的見地よりなる適切な脚注を施して、手堅い資料集である。

3 地域研究センターの発足と「住友と東予 地域；共生の歴史」共同研究開始

本学では1998年4月、総合研究所の内部に地域研究センターを設置し、活動を始めた。このセンターの特徴は、地方大学がスタッフの専門多様化により特定分野についての共同研究が組織化し難いという状況にかんがみ、学外に適切な共同研究者を求めて一定のプロジェクトを建て、慎重な審査を経て本学独自の研究費を3年間に亘り助成しようとするものである。

第1年目の昨年度は2つのプロジェクトが

採択され、歴史関係では学外2名を含む4名の担当で「東予社会と住友：地域の史的特質から見る企業との共生関係」（代表者 経済学部；岩橋 勝）がスタートした。この研究の特徴は、別子・新居浜を中心とする住友企業グループ発展の歴史をふまえて、地域の対応、生活の展開を跡付けようとするもので、江戸時代中期から現代までの長期を対象とする。現代史における企業城下町問題、企業撤退反対運動、公害問題（ないし公害反対運動）、雇用確保問題などを総括し、一定地域で繰り広げられたこれら時代ごとに方向の異なる問

題を歴史的に一貫した論理：「共生」で説明しようとする。

学外からは、住友銀行OBの藤本鉄雄氏、関西銀行OBの井上英文氏（ともに本学卒業生）がこれまでの、住友を中心とする企業経営者史および東予近世地域史の研究蓄積を引っさげての参加。学内のもう一人は武田薬品工業で20数年勤務した後、本学経営学部で生産工学を担当する湊晋平氏。きわめて異色の組み合わせであり、どのような成果が出るか、期待と危惧の念とが合い交錯している。

98年度大会記念撮影



<1998年11月8日高知大学人文学部にて>

研究 成 果 一 覧 (3)

57. 中川 雄二 広島県立大学生物資源学部

・「Государственный Банк России него элеваторное дело в начале XXв., Вестник Московского Университета, серия 8, история, No2, стр.35-43

・「20世紀初頭におけるロシア国立銀行のエレベーター事業の展開とその意義」

（『農業史研究』第27号、pp1-13）

・「帝政末期における農民経済と近代改良農機具の普及」（『ロシア史研究』第58号、pp47-57）

読書

1998年(平成10年)4月20日

大学の授業—岡山大学における実践の記録—

神立 春樹著

近年国立大学協会などで、大学教育の在り方をめぐって、さまざまな議論が開始されている。改革の二つの方向性としては、(一)身近な地域にかかわる内容をとり上げる(二)グループ学習を取り入れること(三)実体験や現地調査等を取り入れること(四)学生の授業評価等を取り入れること、などである。

なるとラニングではなく、地域経済史を裏証的に取り組んだ。また、近年の研究成果に裏打ちされた実践である。本書の教育実践の特徴をかい

つまずいて述べると、(一)学生が関与するのではなく、岡山県の統計書等を学生が調べるなど、自ら地域の歴史の裏証方法がかわれるような授業(二)農村・地域調査等の実体験から普通性

をとりとえていく授業(三)またこの地域調査を集団的に議論しながら、報告書をもとめるグループ学習を取り入れた授業(四)学生の感想などを重視しながら指導を受けた人間である。氏は「毎回の授業準備に、最低三日間は使っている」と言っておられたが、当時院生であった私には、研究と大学運営の合間を

ぬって、毎週の授業に三日間を費やすことが、どれほど大変かは理解できなかった。だが、自分が大学教員になってみて、じめて氏の授業の重みと熱心さ

教育改革の方向性示す

大学の授業



神立春樹著

が、今ひしひしと感じられるのである。(玉井康之・北海道教育大釧路校助教)

(大学教育出版一六〇〇円)

◆◆ 編集後記 ◆◆

事務局の仕事が遅れてご迷惑をお掛けしています。今回も本来6月に刊行予定が、ズレ込んでしまいました。内容が偏ってはマズイと思っています。今回は松山大学の岩橋 勝氏から最近の研究動向をいただきました。また、最後の玉井康之氏の前稿はご快諾を得て転載したものです。大学での教育に心血を注がれた様子が記されており、独立行政法人化が問題にされている中で、示唆に富んだ内容であると思います。

会員みなさん、とりわけ最近著書を出された方は、是非原稿をお寄せ下さい。

森元辰昭 記